

いう「運動」というのは一体何やの：

▲ うん、さっき原發とガンの例をあげたけれど、社会的な問題としての自分に及んでくる「病氣」みたいなもんに対しての、その原因と現象に対しての「闘い」やな。

つまり、問題があればおこるべくしておこる。そういう生理的なところが、当然の動きが「運動」

や。ーということなんやけど、一方もつこの世の中、あっちむいてもこ、ちむいても病氣だらけの問題だらけ。

これこそが問題や、なんて一つだけで終るもんやない。というて「おもいはゆい、身はふとつ」やから、たまたま目にとまったもの、牛が出しやすくて、自分に合うものとかかわるだけで、まあいきあたりばったりや。

そんな牛やランポランでええんか、といわれても、もともと牛やランポランにしかでけへんというのがぼくの考えや。

● しかし、おいちゃんが運動論をいうのは「運動の連続」と次の展開」を考えるからなんやろ。

その牛やランポランにしかでけへんということ、継続ー



運動論との関係をはっきり説明でけてへんからー

「原發やってたかと思うと、ガザがくるような反天皇ビラつくって遊んだり、東アジア反日武装戦線のことやり出して、そのあとは死刑廃止、一つのことには持続性継続性もない。千人集会なんて一回きりのあだ花や」

なんていわれる：

▲ うん。しかし別の見方からいうと、いろんな現象としてあるいろんな問題の根は通底してる。つながってる。その意味でばくは、いつも二つのことをやってるつもりや。ひとついろいろのやり方があるし、牛やランポランといわれても何でも、これがぼくはぼくのやり方や、と。

● そこらへんで「反原發」に一生けんめいのひとと、おいちゃんの運動論がすれちがってしまふんやな。

▲ それから運動論というところ、さっき出た「持続性」のことになるけど、たとえば「病氣」に対して「治療」が運動なわけやけど、「治療」に対する「医学」「医療」が「運動論」というてもエエやろ。それは「運動」をしてるうちにどうしても出てくるもので、ぼくのはそういう

う経験論的運動論やな。

運動は継続せんけど運動論は別の意味で運動の伝達継続になれへんやろか、というのがぼくのおもいなんや。

10

●「関西うねりの会」の解散集會が暮にあつて参加した。

この時のゲストの小田原さんは、この五耳間に実に三百ヶ所の各地から講演の依頼をうけて、話をしに行きは、たんやそうやけど、その感想として、学校での日の丸・君が代の攻防戦は圧的におんなのひとが頑張つて、男がどうしてだらないのかという話をしたのは、池田さんは、

「この五耳間は実に楽しかった。いつでも同じ顔ぶれやけど、それは獅子身中の虫になつてもういっぴきの虫と出会う楽しさだ」というようなことをいはずたんやけど、

うねりの事務を担つてきた人からは「Xデー当時のTVの天4チャンネルに対する人々の反応や、それからあの時の五人あまりも出てきて盛り上つたデモは何やったか」「あれはTVに抗したような人がデモにも出てきたというのでは決してなく運動してる者たちの総大な金太郎飴や、たんや」「自分たちは小教派なんやということをもっと自覚した方がエエ」「大衆と連帯してなんて安易に云わぬ方がよ

い」「一般の人の延長に自分がいるというのではない。誰とつながっていくかをもっときつちり考えた方がいい」という意見が出た。そしてまじめとして杉村さんが「反天皇制運動は、本質的に大衆運動の質をもっている」と考える。にもかかわらずいまの絶対的な小教派状況をどう考えるのか、この小教と多数との関係をどうするのかといわは、て桑原さんは「現実にするごい向をつきつけるのが小教派の役割」やとむすびは、たんや。

やっぱり運動というのは、どこの運動でも多数派をめざしながら小教派でしかないということこの悩みやなあと思つたな。

▲ それと関連して、インパクション(78号)特集「左翼」というスタイルをおもい出した：

● 巻頭のことばで伊藤さんがー

「ハードで権威主義的な『左翼』、あらゆるものを「ひとつ」の原理から裁断し、「ひとつ」へまとめ上げようとする『左翼』。そんな『左翼』とはすっぱりおさらばしたい。僕がほしいのは、柔らかいと同時に反権威主義的な精神を失うことのない左翼、自分たちのそして他者の固有性と複数性をきちんと認識できるような『左翼』、そんな左翼だ。」と書いてはるやろ：

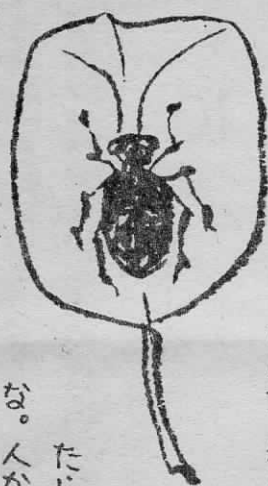
▲ その「左翼」いうのを「アナ」とよみかえたら、まるでぼくが25年前ごろゆうてたことと同じや。

「アナ」も、そしていまぼくが多少かわってて「市民運動」も、多少変わってきたというても、むかしも今も「左翼」と大同小異や。

● わたし、類はぶ、と前から集会なんかで見て知ってたんやけど、話するようになったのはごく最近やから、誤解してたのかもしれないけど、伊藤さんもわたしからみたら、カタイ「左翼」の人に見えてたんや。そやから、この文章みて、「アッ、ズッコイカ」と思ったんや。スタイルということからいうと、わたしには伊藤さんもまぎれもないカタイ「左翼」にみえてた。

▲ そんなら、あんたは？

● 自分をハードもソフトも「左翼」ということばで考えたことないけど、他のひとからみればやっぱり「左翼」なんやろなと、このごろ思っわ。



▼ ふーん。と

んでもない、いうて否定するかと思っ

たら、なかなか客観的や

な。人からみたらあんたは「

左翼」も「左翼」、知ってる人には「アナ」も「アナ」でそれも「風変わり」とカンムリがつく「過激派」やで。

● ヘルメットもかぶったことないし、さまり文句のゼッケンなんかつけたくないし、漢字ばかりのシユアレヒコールなんて口がもつれるし、わたしは党派や男たちの運動とちがうスタイルを少しはつくり出したつもりやたんやけど……

▲ もう今じゃめづらしくもなくなってきたけど、たとえばあのハデハデポンチョは、はじめてみる人には、メツトや覆面と同じで、異様なもんや。

● そうなんや。競艇場でアルバイトしてたとき、中核なんかが火えんびん投げたとか、地下鉄とめたとかの事件があると、まわりの仕事仲間がかならずわたしのところにきておまえの仲間がやったんやろと冷やかしくくる。そんな人にと、ては赤も黒もピンクも色なしも、みんな同じや。

▲ 「レフティズムの復権」ということで伊藤さんの司会で粉川哲夫さんと山崎カヨルさんが、なんで左翼が毛嫌いされているかということについてしゃべってはるやろ……

● わたし、今どきこんなことが議論になるのがふしぎな気がしたんやけど……

粉川さんが「古典左翼あるいは教条的な左翼主義はもう

終っている。そんなものはとくに総括されてる。だけど左翼という全般的な呼称で含意される運動や思想が減じたとは全然思わない。」

山崎さんが「左翼的経路をいっばいやった人たちが、そういうエコロジーだのフェミニズムだのいうところにわーと今でもいるわけですからね。100%党派政治に吸収されなかった。そこからいわば離散してしまっただんたちと言うのは非常に多くて、そこは僕は希望だと思ってるんです。ーというふうに左翼の可能性、希望を市民運動においてはる。

▲ ぼくらが今問題にしているのは、この市民運動の中に根づよく影きようし残ってる、まあいうたら「左翼」のスタイルや、マルワシズムの影きようといってもいいけど、ぼくらがいっしょにやって、どうしてもその壁にぶちあたる。それがぼくらの今の問題意識やし、市民運動の問題や。伊藤さんらは単純にそれが希望やとゆうてはるとは考えられへんけど、ぼくらの問題意識とかさなってるとは云い難い。

● だいたいスタイルというけど、左翼はいままで議論の山崎さんと粉川さんの話の中では、論争や議論が全くなかったからくさってきたというふうにゆうてはるんやけど、

わたしからみたらんはいっぱいあったけど、スタイルについては、もっと具体的にいうたら、デモにしても集会にしても形式的、紋切型で、そんなことについては全く考慮の外というかんじがしてた。

自分たちの思想、イデオロギーをどう表現するかという問題意識はまるでなかったんやないの。

▲ ぼくにいわせたら、自分たちの思想やイデオロギーを行動を通じてどう表現するかという問題意識はまるでなかった。追及されへんかったと思う。

● わたしらはまた表現ばかり考えてきたんやけど、この「特集」読んでみると、ではハードで権威主義でない、ソフトで反権威主義的な左翼はどんなものかについては「市民運動」に希望をつなぐだけで殆んど語られていないよ。

▲ その市民運動が「フティズム」の希望になるには、いまい何が問題か……

11

● わたし、結局のところ「運動」というのは、やっぱり多数派をめざす「陣取り合戦」やなァーと思ったんやけど、

▲ うん、ちよ、と飛躍するけど党派性を残存してる運動の特徴の一つは強い多数派志向や。しかし、どんな運動で

も本音のところでは、ばしの教派をのぞんでる。こういうことでは、党派性を否定しているような市民運動にも党派性はまぎれこんでいる一かなかな否定しきれない。

そやから運動の質の新旧(脱皮)度のものでしは、そのような党派性を常に、どのように否定し克服しようとしているかであって、党派性を他人事みたいにして思っている市民運動の党派性は、かえって根深い。

● 市民を自分の方へと引込むということで、市民運動一たとえば都市の反原発運動は、「陣取り合戦」そのものやろ。

▲ ぼくがそこでいうてるのは、何よりも「世論」を味方にする、背景にする、ということ。多数派志向とちよつとちやうねんけど、まぎれやすいとちや。

● 「世論」というのは、おいちゃんがよく云うてる「自分も一人の市民であること」においての「世論」を味方にする一ことやけど、「多数派志向」というときには、本来共同戦線上にあるべき党派が他党派と仲直をとりあうようなことも当然出てくる。

▲ ところで、こつみてくると「党派性」というのは、ワ



ずるけど、一がいにな否定してよいのか、の問題はのこっている。

ルイとこばかりのようやけど、19世紀後半から20世紀前半にかけての、いわゆる「社会主義時代」へというてよいと思うのは、また「党派性運動の時代」やった。そして、それゆえの大きな意味と力をその時代に即して發揮するものやった。それが運動の拡大、発展、体制化とともに党派性がはらむ矛盾、欠が一ぱいあらわれてきた。

● それが一挙に噴出して、ついに社会主義イデオロギーの没落へとみちびいた一ということやな。

▲ しかし一世紀にわたって徐々に形づくってきた社会運動のマニユアル、その前例化、慣習化、常識化した形式や経緯の遺産は、捨てられるものもありながら、依然として新しく出てきた運動のなかにいる人ながたちで残っている。

それをたとえば山崎カヨルさんのようにひくめるめて「レフティズムの希望」というのにはあまり樂觀的

● 何かの集りで「党派性」「党派とは」ということで、

連想することはあつたことがあるねん。ならべてみると、

イデオロギー・規約・綱領・運動方針・盟約・分派・

派閥・上下関係・内争・帰属意識・業務・責任・オルグ

団結・護教・献身・領導・

これみてどうおもう？

▲ ぼく個人の信条・立場からいうと、原則的にはみんなお断りしたいもんばかりや。けど、それは好き嫌いの問題で、一つ一つそれ自体のこととしては、良いとか悪いとか一がいに云えへんと思う。

しかしこれらの「語群」は顯著な一つの傾向があるやう：

● 自由とか恣意とか解放とか連合とか平等とかいうことばと、ぴたり正反對やということかな。

▲ それもあるけど、党派のなかではこれらのことばの持つ意味が、個人の自主性・自発性を抑止するものとなり、

個人の解釈をゆるすめものとして、党派への絶対的な帰一

へと引き出すという性格のものになるという問題や。

● 宗教がて同じやと思うけど、信者でないもんからみたら

なんであんなけつたいなもんに入信するんやると理解で

けへんけど、入信するひにとつてみたら自分で進んでや

ることやから、はたからみれば束縛以外でないことが、本

人にとつては気持ちええことなんやろな。

▲ 党派が掲げてるいろんな目標には大ざっぱにいつて、

あんたも大てい賛成するやろ。参加してその実現に、献身し

たいいうおもいは、誰もがふとしたときにもつもんや。党

派は、はじめはその献身をうけとめるものとしての大きな

プラスの力として働く。しかしあるときから、とたんに一

変して決定的なマイナス矛盾になる。

● 私は党派やセフトにはなるべく近づきたくないし、あ

の運動のやり方は肌にあわん。けど、なんやかやいいなが

ら党派の人は、何かことがあつて「やらねばならぬとき」

には、必ずというか動く、南ういうことでは大したもんや

と感心するなあ。

▲ 伊方以来の市民運動は、すぐへたばって、消えたり生

れたり、変転がざりない、という感じやけど、党派運動を

経過した人などが入つてくるグループを見ると、その人は固

固の状況にあまり左右されずに、自分のやるべきことはや

るといふ姿勢がいつもあつて、それがグループの継続・維

持という面で大きな支えになつてゐる。

● けど一面でそのことが市民運動が党派的運動のマニフ

アルみたいなものに知らず知らず影さようされるといふこ

とにもなつて、それが運動のひろがりをも阻んでゐるとち

かう。

▲ その功罪を含めて、山崎さん流の云い方を真似ると、
ぼくは市民運動に欠落している。運動の持続性・連続性・
継承性を、どうしたら新しい「カ」として市民運動に附与
することができるか、の「希望」を、運動論のなかに見出
そうとしてるわけやねん。

12

▲ いつか鶴見さんが「市民運動はそのときどきの一回き
りのもので、『伝達』とか『継続』というのはむずかしい」
といはったことあるやろ。

● いや、それちよ、とちがうかも、「市民運動に續上げ
なんてできないですよ。市民運動やって大きくなったら
その遺産をもとにして、また何かその上にやろうとするこ
かいうのはむずかしい。運動というのは、ゼロからも
う一度ゼロをかきまわしながら新しい土台ができていく。
その中で新しい組合せがあつて新しい知恵と方向がでてく
る。だからどういふうにしてゼロから一が出てくるかっ
ていうことに興味を持てば、運動って面白いんですよ。し
へひみち通信No.11「死刑反対をめぐる」っていうてはる
んや。

▲ あせうか、ちよ、とぼくの早合点やな。ま、その早合
点に即していうと、そのときぼくは「うーん、たしかにそ
うや」と思いながら「しかし、しかし」と、なんとか留保
したいおもいやった。

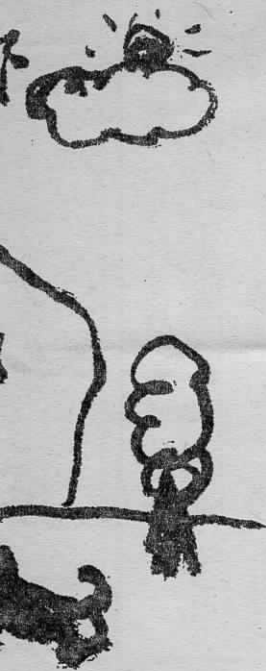
それは「なんで一体ぼくがそもそも運動をつづけてるか」
いうことを自問自答すると、ぼんやり出てくるもんがある
からや。

● わたしは「あんたなんで運動続けてきたんか」とときか
れたら、「たぶん、わたしのガンコ・偏狭・ユートーのき
かんーいゝまは太分くずれてるけど」とくに30代までの性
格のせいやろ」としかいえんなあ。

わたし、ゆのとき、生れてはじめて街でびらまいて、そ
んときは「ああ、ああ、一生こんなこと続けるのか」とく
らゝい気分やった。おいちやんのいうように、びらの書き
方、まき方を一回一回やり方を変えると、そんなこと、
はじめは考えたこともなかった。ただまき続けることだけ
考えてた。

それで思いつくんは、いつも面白いやり方
を考える

佛原さん
が、「紙



ヒコキもさいきんマンネリで……となやんでたけど、その相棒の太田くんは「そんなことはあんまり気にならん、自分で決めたことをずっとやるだけや」とゆうてた。同じつづいてる人でも、そのままでいける人と、なんか変えんとやっいていけん人と二とありあるんやな。

しかし一般的にいえば、運動を長く続けられる人って、マンネリがあんまり気にならん人とかがうかしら……

一時、串高健がベ平連で一生けん命やってたんやけど、いつも同じことを書き、いつも同じことをしゃべる、というのに耐えられなくなつて辞めた、という話を聞いたことがあるけど、創造と運動というのは一つのこのように思うけど、実際はむしろ疎外しあう関係になつて……

運動なんて、やっぱり、皿洗、たり、そうじするのと同じで、マンネリで慣性にならんと続けられへんのとちがう。こんなデモのやり方しとてええんやろかとか、こんな集会でええんやろかって悩む声を今までよそのグループで聞いたことない。

市民運動にないロフトの持続力というのは、マンネリをマンネリとも思わない「まじめ」なんやで。そして一方「まじめ」さが運動を疑り疑りのおもしろくないものにしてしまふんやけど……。

▲ さつ

き金沢の

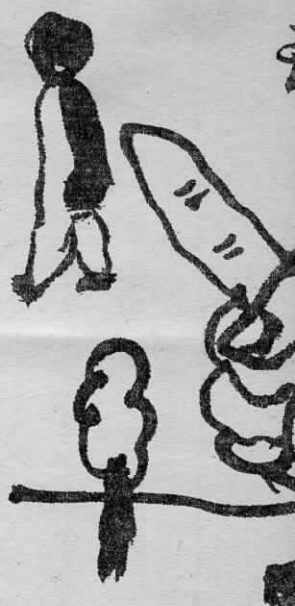
井沢さん

と電話で

話をしてて、「なんで運動をつづけてきたか」さいたんや。とつぜんやから、返事がはじめ「まあ、何となく」というようなことやけど「あえていうたら……」ということでも何からも自分を束縛されたくない。で自由に振舞おうとする。とよけい束縛がくる。自分は束縛について敏感すぎると思うが、その束縛感が自分を運動へと向かわせる。」

「そしたらこんどは運動が束縛になれへんか」ときくと、束縛を感じたら、運動からすぐおちる。運動がウソげなもんになつたら、あっさり引込む。運動があまり一つの事の深味にハマらないとか、やり切ることがない、などと云われるけど、自分と運動との関係は「束縛と自由」にあるんやから運動として一つのこととして自分のながつながつている。」

それから運動がなんでつづいてるかということも、うゑとつての面からいうと、私の興味は「静」の美より、つねに変転する、動にあって、変化し運動は何よりも未知の変化をつくり出す可能性であるし、また「変化」こそが



運動の創造性を保証するものであることをもふくめて、それが運動のおもしろさだからという筈やった。

13

● 井沢さんは党派を経験して、それから市民運動に長いことかかわってきはった人だから、それだけに党派・市民運動双方のマイナス部分がよくみえるんやな。

▲ 「束縛を感じて運動する。束縛を感じて運動からオリル。そしてまた束縛を感じて運動を……というくりかえしは、個の「生」のリズムにあわせた自由自在の、永久革命・永久運動論」や。

● なんか、シニグレイッシュの個々の課題運動との恣意的で不即不離な関係を、「自分の内部に引きこんでひとつのつながりとしてしまってる」とこも「変化が運動の創造性を保証してる」というこも、おいちゃんとうよう似てる。やっぱり長い運動経験のなかから自分の個人的運動論をつくってはんねやわ。

▲ ぼくはそれをとくに「方法・手段・技術」として、具体的に論ずることで「伝達」し、運動の持続性・連続性につなぎたいと思たんやけど。

● くりかえしになるけど、④党派運動のなかでは、運

動の、それも「行動のやり方」なんていうことはもう全く軽視されてる。相手にされへん。◎市民運動では、はじめ「そのやり方のおもしろさ」は迎えられるれても、ハウツの意味以上に考えられることがないので、すぐ「おもしろかった形式」になって固定してしまい、だんだん慣れてマンネリになってしまっで終る。どっちにしてもおいちゃんという運動の質の転換なんてことには、なかなか結びつかんなあ。

▲ たしかに、対象もヒントもずれてる。

● それからもう一つ、「運動の持続」を問題にしながらおいちゃんは又「野次馬のすすめ」なんてこともいうやろ。野次馬は、その時その時の一回きりの無責任なアゲ花や。わたしなんか枯木も山のにぎわいの野次馬で、気がむけば出かけていく位のものやし、もともと運動論もへたくれも関係ないんやな。

▲ それちょっと誤解がある。「自分がその時々の無責任なヤジ馬であること」「野次馬であるよりしようがないこと」を意識することで、ヤジ馬になるだけでなく、ぼくにとって「ヤジ馬を方法とする」ということや。それがヤジ馬の持続性・継続性や。

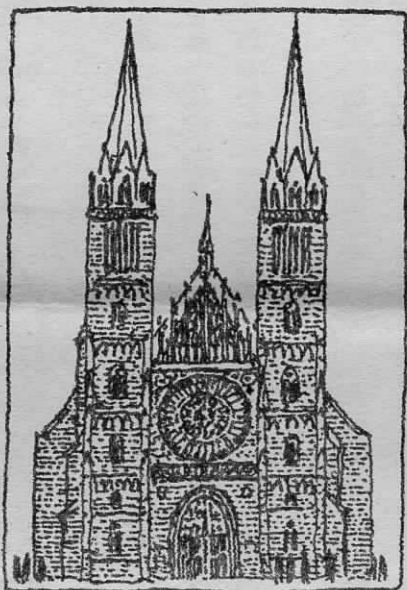
● なるほど。そうかアーと一応いいたいところやけどー

わたし、おいちゃんここにきて、20年あっという間やった。
で、このごろ、やっと、ボクボクおいちゃんのいうてたこ
との意味とかワケとか考えるようになったし、少しづつわ
かるようになってきた、というところや。しかしこんなにそば
におってもこの程度やから、なかなかひとまでは通じひ
んのとちがう。

▲ そのことがこんどでようわかつた。その上でただ自分自身だけの納得をふう子さんに云うとしたら、こ
ういふことか。

「自分がやったことについて、そ
の一回一回をふりかえってへ区切り
をつけて、考えて、その「あとづ
け」を、これからの、つまりいまか
らのうごきに使う、というのはあた
りまえの話や。生きてる人間、うごいてる人間は、自然に
無意識でそういうことをやってる。へくどいようやけど、
それをちよつと意識化して、なんでそうなのかを、「やり
方」「方法」の問題として見ずえることからぼくの生きざ
えが出てくる。

ぼくはこのことが、ぼくの運動へそして生きてるという



意味やといいたい。一回一回で行動（行為）の結着がつく
のはほとんどまれで、それで一体何がどうなったのかさ
っぱりわからないのが運動（生）なんやから……」

● うーん。しかし、新耳から淋しい話になってしまったな
ア。もう「直接行動」に出すのやめよか。

▲ ほんまに生れてぼくはナントワザ。よあアホなこと一

生けんめいしと、たな。すこしは
あると思つた反応は、あんなもん
こだまや、たんやな。空ぶり人生
やったんか。ヤレヤレとちよつと
ガツカリもするけど、しかし内
は、自分としての自分の生き方を
やってきたんやから、ごつと損し
たとは深刻に思つてるといふほど
でもない。かえつてスッキリした

部分もある。

● おいちゃんがずっと前「詩のようなビラ」でなく、「
ビラのような詩をかきたい」と、詩集「ビラ」について「の
後記でかいてたやろ。

おいちゃんはどうしても運動家やけど、本性はやっぱり
詩人なんやと思う。詩人の運動論なんや。つくづくそう思

うよ。

▲ 詩人として、もう「死人」に近いけど、ぼくにとって運動は、たしかに「詩」と通じてる。ま……ふうみさんに

♪「やっぱり詩人や」といわれて成仏するか。なんまんだぶつ、なんまんだぶつ。

ー了

社会主義人物事典用原稿

小松魯代吉

▲ 一九〇六年三月生 ▲ 七一年四月没・55才 ▲ 植木町・金屋加工など。
▲ 夜間商業中退 ▲ 野蠻人社・黎明社・A思想研究会（農村青年社運動）
日本アナキスト連盟などで活動 ▲ 逮捕・裁判歴・懲役10ヶ月ほか10数回。

川学生のころ父に連れられて、へ借家へ同盟へ逸見直造

の海鏡会にいったことがある。今宮村小学校一年のとき、

二年上級に逸見吉三がいた。（10数年後の25年8月・東京

深川でひらかれた「バクー」ン没後50年集会以て澤田に立

つ川松をみて、丁度上京していた吉三はびっくりした、と

かいている。高川一年修了後、銀行給仕・店員をしながら

夜間商業にいくが、関東大震災での平沢計七・大杉栄ら

とくに朝鮮人雇役に憤激して、24年に上京。新聞配達、土

方、立ちん坊などと転々して、自由労働者となった。

黒龍会商標福泊折で知合った秋山重太郎、加藤利造らと

へ自由労働組合相互会をつくったが、そこへよく泊りに

きた沢田武雄、村上義博・他に三上由三・生野進の五人で

北千住に一軒家を借りた。へ野蠻人社を名乗って活動し

26年へ黒色青年聯盟へ全国労働組合自由連合会へ加盟

した。そのころ野蠻人社は、北千住署に急襲され、全員逮

捕、立退きを迫られて解散。沢田とふたり八田舟三宅に転

リ込み、ミーデーではどうをまいて、日本提署で20日の拘留・愛宕署で29日、さらに新聞紙法違反で罰金20円を喰うたりのあげく、沢田の御屋敷へ。

27年、日病氣になり大阪の兄の許へ戻る。4月、山口勝清に呼ばれ、広島県福山へ行き、公金堂の下足番になったところへ沢田がやつてきた。早速三人で「徳明社」を結成へ「解放運動」を発刊した。とたんに「新報社」にストライキぼつ発、新報社本部に泊りこんで奔走。そのデモ行進中警官隊と衝突して、公務執行妨害、器物毀損で罰金20円。更に争議団解任式最中に襲つてきた警官隊と大喧嘩となり尾道刑務所に送られて懲役10ヵ月。(山口・沢田は8ヵ月、大阪製紙がら心機にきた日野正義は、扱げた旗竿が壁に突き刺さつて4年。この大騒動におどろいた会社は争議団の條件をのんでスト一挙妥結)

28年、出獄すると、三二五回共全国大検挙のあとで、状況が一変していた。丁度訪ねてきた浜松製紙争議以来の同志志林隆と、福山から広島・山口・山陰をまわつて、奈良丹波市の野口市郎を訪ねたが、すぐ昭和天皇即位の予防検束で福山署へ送られた。

12月、大阪の兄の許へ帰り、関西黒旗連盟で活動していたが、まもなく上京、江東自由労働事務所に落付いた。

ところが江東自由は、星連のサンジカリズム攻撃の渦中にあり、内ゲバなどの横行に嫌気をさして、29年離京、静岡の沢田を頼った。大塚昇ら同志の世話で、静岡市馬淵町に一軒をかり、そこで知合ったハツと世帯をもった。

30年、運動の新しい方向を模索して、沢田・石川金太郎らと「A思想研究会」をつくり、自覚とその事務所とした。

31年2月へ黒旗誌に掲載された「農民に訴へる」に大きな衝撃をうけ、さらに「農村青年」創刊号に接して、その「農村イズム」に共鳴、A思想研が農村運動と積極的に共同することを決定、ヘアナルキストを創刊。12月、農青社秘密パンフ「吾國に於ける革命の完行について」を受け、峰起時のA思想研の対応として、静岡地方の権力機構、施設の破壊目標を事前に調査する件を、協議決定した。

32年、農青社東京グループの検挙、解散声明などにより年末、大阪へ帰り、生活の為「実業之母関東西支局」を設置、ヘビジネスマンを刊行、運動からやや遠のいた。

しかし各地同志が絶たなく来訪し、いつも二三泊の食客があり、無政府共産党事件の二見敏雄と芝原淳二が、ピストル入手の相談をしたのもい松定だった。34年頃は高畑信一がずつと寄食していた。

35年11月、無政府共産党事件で拘引され取調中、農青

社事件覚悟でさらに拘留されたが、不起訴となった。

戦後は日本アナキスト連盟にいち早く参加。48年より同大会では全国委員(大阪)に推された。晩年最後の仕事は茶葉没収で誰も見たことがなかった「中鉄鉄道積集・黒パン」と「祖國と自由黨・大杉栄追悼号」を発見、その二冊

の複製版を刊行したことがあった。彼について

「山松島代吉追悼集

へ叛逆録」のなかで山

口英は「戦後大阪のア

ナ運動は、裏方に徹し

た山松さんの動きをぬ

きにしては、或は運動

そのものもなかつた

と言っている。また安

田リキ子は、「山松ち

ゃんのことでは忘れら

れないことがある。：

私がそつと茶碗にこぼ

くを盛っている」と、

リキさん、女だけが焦

コンコン

挽歌Ⅲ

棺ノフタヲトルト

墓田 傳ガ

土氣イロノ

掌ノヒラホドノハサナ

他人ノ顔ノ大面

ニナツテ 埋モレテイタ

フタヲシメタアト

十數人が列ヲツクツテ

釘ヲウツ マネヲスル

コンコン 死ンダラシマイヤナ

コンコン 死ンダラシマイヤデ

コンコン コレが「死ンダトイウコツチャ

げ飯をたべるのをやめよう。いまは男も一しよにたべる時代だ。そのために運動してるんじゃないか。ぼくの茶碗にもいれてくれよ」といつた。……とかいている。もう60年もの前のことである。引年没。ゆオ。(未定稿)

宮本三郎

▼一九〇七年三月生 ▼86才 ▼紙

函製造(家業)・製本工など ▼高小卒

▼大阪技工組合・大阪合成労働組合・

関西星旗連盟などに所属。▼逮捕

拘留数回 ▼父・逸見直造・母宮本

川政・長姉逸見朝子・長兄・長三、次

兄・吉三・養母・逸見ナラエ。

一九一九年、大杉栄がヘヤ一次労働軍

動へを出した。そのへ労働社(大阪)南

出張所を引受けた。父の逸見直造から

一部に2万の売上げ歩合を出すといわれ

て、その五万の宣伝をやったことがある。

級友をきき、揃いのタスキをかけ、革命歌をうたつて、新世界通天閣前、ときに千日前道頓堀まで遠征した。当時、一般の夕刊が2銭なのに、へ労働は20銭だから、あまり売れなかったが、くろ部はけても、小學生にとつては充分の小遣いだった。それに演説会などがある

と20、30部も売れた。

父はへ労働者無罪法

律相談所へ借家仲間として連日仕しく、また全国各地から、いろいろな運動者が訪ねてきた。その宿泊滞在寄食者がいつもいて、母と姉が、一日にひる二升、よる二升の米を炊き、おかずをつくった。それらの費用をいくめた。父や次兄の活動費と、一家の生計を支えたのは、家業の紙函製造でも、もっぱらそれと受け取るしかなかった長

棺ヲハコビダスノニ

4ヨット 手ヲ添エタテ

重クテ、突然 重クテ

階段ノ途中デ

手ヲ放シソウニナツテ

離セナカツタ

雷極車ガ スーッと出テイツタアト

ダレモイナクアツタ境内ニ

樟ノ木ガ ニ本

ボクハモウドコへ行ツタヲヨイノカ

夕暮ノヨウナ 見知ラヌ町ノ

マダ 午後三時・

コンコン……

敗戦で焼失するまで、多くの運動者の拠り所だった。

さて三郎は、25年、一時家出上京して、和田榮の許に寄食。東京印刷工組合の争議に飛びこんでいる。帰阪してヤロチン社事件で入獄中の伊藤藤三や中浜鉄（26年4月刑死の一週間前に面会したのが最後の別れだった）への差入れに、三日とおかず通う。大阪合成分組・関西星旗連

兄藤三、母や姉と女工さん二人の働きがあつてこそのことだった。五つ違ひの次兄吉三は、はるくから運動にとびこみ家に落付かなかった。それで三郎はクッ8つから紙函斯りを手伝いながら、滞在す運動者たちと親しみ、その語るはなしや

おれこれの出来事を見聞して成長した。
*23年10月、父の急死のあとで、震災後避難而下する同志の来訪あとを継ぐ、逸見一家のへ水崎町の宿へは、父のおもいをうけついで家族の献身で続けられた。27年、ついに紙函業を廃業したのもそれは、例えは、戦時中に瀬島太郎のように出獄して、行キ場のあてもない同志が、まず訪ねる落付キ先きとなり、

盟に参加、大阪市電争議高麗山麓城の応援や、米田サツコ・パンゼツチの処刑反対集会で逮捕されるなど、次兄吉三のあとについでである。

ところが28年、天皇即位の予祭検束で二人とも拘留されるということがある。その後、差入れ手向も含めた家族の負担や気苦労をたえ、三郎は運動から手をひき、背後から吉三を支えるという話し合いとなった。

以降、三郎は、戦中徴用されるまで長く町工場で製本工として働き、戦後46年、大阪書籍労組執行委員、66年に堀内鉄工所雑役として入社、労組を結成して書記長、在職5年で停職退社して、現在に至っている。

三郎は、晩年往時をふりかえつて、へ水崎町の宿エサブロー少年堂之帖へへ水崎町の宿エー大正、昭和期大阪の社会労働運動者たちへあいつは社会主義者やサブロー少年堂之帖へをかき、81年、私家限定版、三冊を刊行した。彼がひたすらに歩んで来たその生涯の意味は、たとえはその三冊にしろされた、水崎町の宿の来訪者名簿の名をみるだけでも明らかである、順不同に拾うと、

大杉崇、和田久、村木源、岩佐、高尾、中兵衛、難波大、近藤、後藤、和田、大久保、桑原、高津正、三田村、高橋、吉田、木本、吉田、伊串

久保、生島、能取、遠藤、小池、河本、倉地、中尾、林、山西正、山西次、伊藤、大串、山田、山口、殿水、と百数十人に及んでいる。

その著作のあと三郎は、物故者同志の墓を訪ねての八献歌巡社へをはじめ、すでに10年、30数年の間に至っている。そしてその献歌が、つて新南五、少年時代、うたい、その後の折り返しに歌いおぼえた、革命歌、労働歌、メーデー歌、追悼歌、星旗の歌、テロリストの歌、教会の歌、同志の歌など20数篇の全章節を記憶して、墓前に佇立して語りかけるごとく、献歌して叫ぶがごとく、いつやむともしれない。

三郎の運動者としての生涯は、彼のいうように「ぼくはぼんまに、とくに何もしてまへんのや」であるとしても、母や姉、長兄などと共に、父直造次兄吉三や



また「水崎町の宿」を訪ねた、多くの運動者たちのゆきやその生涯の足跡と、不可分につながり結びものではある。それは、何も特記すべきことがないということ、かえって一そう明らかに出てくる、三郎と同様の無名の何と

なく、それ故に歴史から消えていつに無数の運動者とその家族、隣人たちの、こよいの意味を伝えて、といえようか。

★ 追補※へは頁下段8行目に以下挿入し、『21年・高小

村上義博

▲一九〇三年ころ生れ ▲五五年ころ没 ▲自由労働者 ▲尚々歴未詳
▲筆名 沖田 ▲中央自由労働組合、野蕨人社、黒色青年連盟、AC
労働者連盟、自由運動社、日本アナーキスト連盟などに所属

村上については二・三の断片的伝聞だけで、ほとんど資料がない。

① 一九二四年夏ごろ、震災後の復興事業現場で働く、自由労働者だった。赤坂溜池の黒龍会簡易宿泊所で三上由三と知会った。三上は村上によつてアナキズムにのめり、終生の活動家となった。

② 同年11月、同様にして知会った沢田武雄、山松龜代吉、生野進・三上の五人で、千住に一軒家を借り、へ野蕨人社を名乗つて活動をはじめ、26年1月に結成のへ里色青年連盟に加盟、その時に惹起した銀座事件にも関係した。

③ 北千住署は、野蕨人社の管内追出しをほかり、

を卒業し、や一回大阪メーデーに参加したが、まだかぶつていた小笠原帽で、警官をおどろかせた。また借家人同盟の悪徳家主征伐デモには、大きな旗をもつ三郎少年の姿がいつもあった。』

(未足稿)

近隣からの苦情を口実に、早晩に急襲、全員を逮捕拘引した。留置場では山松が騒いだのを、看守(あとで判つたが柔道四段)が、その襟首をつかんで引きずり出そうとしたとたん、それまで一番おとなしくしていた村上が、突然立ち上つたと思うと、その看守を大外刈りで投げどばした。わあーと平銀をもつてとびかゝる応援の看守たちを、おちほらい薙ぎ倒し、北千住署はじまって以来の大乱闘となつた。村上はずぐ分離され、監視方に送られ、裁判の結果二カ月の徴役をくらつた。この村上の武勇伝に展ひれがついて、各警察署に、要注意人物として通達され、同志間にもへ村上伝説として知られるようになった。

④ 28年5月の内部資料「監視方針特設課調べ」によると

「純正無政府主義」に分類されたA.C.労働者連盟へ入
自由運動社への欄に、三上とあらんで村上の名がある。

この頃の村上は、ストライキと関係は、どこへでも応援
にかけつけ、そのころ大ていのさばり出る産物のスト
破り暴行田から、争議団を防止するのを、自分の役目とし
ていた。

(三) 32年2月27日、次の記事がある。『村上義博君
府下松尾病院に、向引送り入院中……。元氣旺盛、無聊
である。書籍、通信、訪問等してやれり。』(特高は何
かと名目をつけて村上を引張り、精神病院にほうり込む
という手を、そのころからよく使い出し、そのころ村
上は何回も病院に入れられるようになる。)

(四) 次は一パンに戦後にとぶ。――

岡本園戦中戦後日記(岡本社83年刊)46年9月21、22
の項に、『夜10時過ぎ、村上義博現わる』『村上、早朝
に起き、仕事を探すと言つて、めしも食わずに出かける。
……とにかく40いくつになつて、かういふ働きを食つてゐる人
がゐるといふのは妙だ』。

(五) 48年5月14日付、八週刊平民新聞の22号に、山松は
「佐賀市でのヘブナ連西日本協議会」に出席、その翌日
村上と同道して、鹿児島県の武良三を訪問……帰路、別府で

村上と別れた。そして武の通信記事で、「村上は市内盛
り場と駅プラットで、平民新聞宣伝売りの演説をやつた
と。

(六) その後の村上は、各地の旧同志宅を訪ねたりなが
ら、放浪のような旅を、あらうらつづけたいらしい。50年頃
「もう、ぼくのやれるようなことがなくなりました」とい
うハガキが来たことがある。

(七) 没年未詳。最後は、京都の精神病院に收容され
、そこで……。――

そしてあの、へ伝説への数れ頃――
M京ノ五條ノ橋ノ上、私服が六人組ミ付イタ。ブルント
振ウト三ノ倒レ、二人ハ呻イテ踵マル、ノコル一人ハア
バラガ折レタ……。も、今はもう語る人もない。

未定稿

▲ たとえ一人でもミスでも、アナ系の特無名の運動者の名を加
えろとができた……というのがこの「若者」の話をきいたとき、まずぼく
が思ったことだった。▲ しかし事実が刊行されても、もともと「よ
み物」ではなく、研究者が資料に使うとしても、無名者の名は
めくられることもないま、やはり読まれたいのでは……。▲ ま
だ送稿してない未定稿だが、ぼくが捧げる大々やが紙
碑として、「三人」に代表してあらうて、ここに掲載した。

鶴岡町から

▲ 年末、桑田博さんが死んだ。ぼくより二つ年下やった。28日、ふいうささんと二人、犬山をたつて夜々時からのお通夜にゆき、29日正午からの告別式に出て帰ってきた。ぼくが自分のお葬式に出て、戻ったような気持ちで。

「トントント」をひきながら、何度かかき直しているうちに、二行目の「桑田博」というところを、「向井孝」とうつかりかいていて、それから桑田博がかいた詩を、ぼくがよんでるような気になっているのに、しばらく気付かなかった。それは、桑田さんとぼくとか、その間に「死」をはさんでびつたりつながり、お互いに相手をみて愛惜しあっている、という感じなのだった。それで彼の急死（死）につながる（ぼくの？）を、「どうせ死ぬんやったら、

あつたり死んで、まあよかった」と、それほど悲しもうともしない自分の冷静なみにいなものに気付かずにどこかで納得してるんやっただ。



▲ 1月6日、朝広延さんが死んだ。ぼくより八つ年下やったけど、とてもかなわんズグイ人やった。まだまだいっぱい書くことをもってたからそれをあきらめて死ぬのは、さぞづらく残念やつたらう、とそのことだ

けでぼくは泣きそうになる。

昨年6月23日、上京途中あわわが犬山に立よって一泊。手術後なのに思いの外元気にみえた。が、咽喉部切除のいろんな障害や苦痛を日常化した生きざまというか対応は偉絶というか見事というか、それだけでも非凡の人というほかない。

滞在中、廣さんはほとんどしゃべりっぱなしの印象だった。雑用紙にすらすらすらとさすさす筆談は、(丁度むかし新聞記者が電話送稿する原稿みないで)かくというよりしゃべってるようにさりげなく、ぼくらば会話をかわしてるのと同じだった。

つまり筆談が不自由どころか、会話以上にムカがなくて、要領よく、よどみがなくて、廣さんがおいていったその筆談紙(ぶつと50枚)。あとでよみかえすと、飛躍や空間があつて、まるで詩みじなものもある。すてか

ねて、大封同に入れて保存して居るを
いまとりだしてよんでると、あの夜の
合意卓にむかいあつていた蘭さんのいろ
んな表情がうかび、その声も聞えて
くる。

▲ 筆話紙から「ユバが危い」「
オカユバににくい」「オカラたにくい」
「玄米、玄米の焼飯なんかい」「知
めばOK」「せんなんはたにくい」
「味で結局、情やけど。」「情で思い
やりや。しかし思いやりを表す技術は
必要」▲「これは詩でないね」「し
かし向井さんの文章は、プラスの文章
やね」「わたしマイナス文章。ナラズ
者文章」(この適確な指摘には驚い
た)▲「もっと早く学校やめるべき
だった。当学校で遊んでしもた」「アレ
悪や」「管理職でもなし」「やつぱり遊
んでしまふ。教師にも生徒にもホスで
「校長も教頭もご機嫌ともしね」「さ
ぞ鳴るから」「無れ者いうて怒鳴った

ら、その階じやうにひびいて、ほか
の教室もシンとした」ーその他、ポ
ルノばなしや琉歌や京都の料理屋の
ことや、金子光晴と森のことや……
▲ 1月23日、高田良約さん永眠。
献体して数年後、福井県小浜西橋寺
に納骨とのしらせをもちつた。10年
ほど前、ちいさくハヤリンク阻止闘
争で平尾弘毅さんと知己になり、
その師僧良約さんが、往年大杉や岩
佐里に出入りしていたということ
をきいた。(その良約さん60歳の時、
一向宗本山の在り方に異議を申立て
二人の弟子と共に一向宗本山から離
脱、そのご岡山県新見の弘毅さん宅
に身を託していた)

その良約さんの生涯をまとめた
と、ぼくが聞きがきしたのは二年
前である。すぐ書けるように資料がま
とめてあつて、書き出せば半年ほど
で仕上がると思つたが、先口の

「安田輝貴」さんの「師僧」が一向にす
すまず、……というふうなことがあつて
とうとう、生前にそれを見てもらつて
いうことができなくなつた。(この
悔しいのは今にもあまりにも何度とく
りかえしてきて、「どうにもならない」
とだんだん判つてきた。やれるだけの
ことはやるにしても、結局は、ほ
とんど中途半端のやりつぱなしのまま
「或る日」が来るのだろう。)



(5)

● 「非暴力直接行動」と名乗つても、内
容は二人の個人紙みたいかもんやし、WRー
いうのも有名無実やから、「名前かえよか」
「出すのやめよか」などないながら「どうす
る？」となる話論が出ない……

● ぼくとしては自分の立場と、故山鹿さ
んのおもいを表せる意味で、WRーの名に
こだわりたい気もある。

● 友里から寄贈、大交換、儀礼での発
送を10ほど減らします。当方への送付
も、ご停止おねがいします。2月4日